

阿蘇の農耕祭事 No.4  
火焚き神事



文化財保護委員長 渡邊 照義

これまで3回にわたって取り上げました阿蘇の農耕祭事ですが、今月は役犬原地区の霜宮(霜神社)で毎年8月13日から10月19日まで行われている火焚き神事を紹介します。

霜宮で行われている火焚き神事は、長い歴史の中で続けられてきた五穀豊穡を祈る信仰のひとつです。阿蘇は高冷地で古くから農作物の

栽培には厳しい地域でした。厳しい自然条件の中、果敢に農業を営んできた人々は五穀豊穡を願い、阿蘇の神々を信仰しました。火焚き神事は、阿蘇神社と国造神社の祭事と共に「阿蘇の農耕祭事」として昭和57年に国の重要無形民俗文化財に指定されています。

霜宮と火焚き神事の由来については様々な説がありますが、今回は広く知られている健甞龍命と鬼八の伝説を紹介します。

遙かな昔、阿蘇を治めた健甞龍命は家来の鬼八を従えて往生岳に登り、頂上からの石に向かって弓を射る練習をしていました。鬼八は命の射った弓を拾っては返していましたが、50回も60回も石から往生岳まで矢を運ぶのは、足の速かった鬼八でも容易ではありません。へとへとになりながら99回までは取りにいきましたが、あまりに疲れた鬼八は我慢できれず、100回目の矢を足の爪先で蹴返してしまいました。

命はその無礼に大いに怒り、鬼八を追いかけました。鬼八は各地を逃げ回りましたが、ついに高千穂の「窓の瀬」で追い詰められ、命との戦いにも負けてしまいました。命は鬼八の首や手足を斬りましたが、またすぐ元通りになるために、鬼八の体をバラバラにして別の場所に埋めてし

まいりました。しかし鬼八の首だけは天に舞い上がり、怨霊となって毎年夏の終わり頃には地上に降り、霜を降らせて人々を苦しめました。

困り果てた命は怨霊となった鬼八を未永く祀ると約束し、天から降りてきた鬼八の霊は、阿蘇谷の真ん中にある役犬原の地で霜宮として祀られることになりました。

以来、霜による冷害を免れ、五穀豊穡を祈るために御神体を温める火焚き神事が今日まで続けられることになりました。神事は上役犬原・下役犬原・竹原の3地区の年番で交代し、地区から10歳前後の火焚き乙女を選び、家族の老女と2人で59日間



火焚き小屋横の神楽殿で行われる夜渡神楽

昼夜を問わず泊り込んで続けることになっていました。しかし社会事情が変わり、少子化も手伝って乙女選びが困難になり、火焚きは地区の人が交代で行い、節目の行事のみ火焚き乙女が参加する形となりました。時代が変わり、祭りの形も少しずつ変化してきましたが、日々の生活の平安を願い、農作物の豊かな実りを祈る火焚き神事は、地域の人々の手で今も大切に守り伝えられています。

火焚き神事の日程

8月13日 注連卸し。

霜神社・火焚き殿・神楽殿・天神の注連縄を取り換える

8月19日 乙女入れ。

御神体を火焚き殿に遷座し、火焚き乙女が火焚きを開始

9月15日 温め綿入れの神事。

御神体を包んでいた真綿を新しいものと取り換える

10月16日 乙女揚げ。

火焚きを終了し、御神体が霜神社へ還御

10月18日 夜渡神楽。

神楽殿で神楽が奉納され、火焚き乙女が火渡りする

10月18日 霜神社の秋季例祭